

「こんがらかったアルキメデス」

中山 みどり

こんがらかったアルキメデスは

河原の道を疾走す

ベビースリングに優しく手を添えるお母さんを追い越し

新幹線の散らばるTシャツの坊やを追い越し

夏の雲を追いかけて走る

こんがらかったアルキメデスは

息が切れて叢に腰をおろす

夏の雲を見上げていると

野球部の集団がのっしのっしとやってくる

雲をみながら雲をみないでいると

のっしのっしと野球部は去っていった

こんがらかったアルキメデスは

また走り出す

さつき届いた手紙から逃げるように

父さんが倒れたという手紙から逃げるように

心配しなくていいよと母さんは言う

疲れたただだからと言う

もうすぐ退院するよと言う

こんがらかったアルキメデスは

明日の仕事を考える

誰でもできる仕事だけれど

誰でもできる仕事だから

手を離せばどんどん離れていくだろう

いつそ手を離してしまおうか

その手で父さんの手を握ろうか

こんがらかったアルキメデスは、、